

Title	目次
Sub Title	
Author	
Publisher	
Publication year	2018
Jtitle	理系の西洋哲学史；哲学は進歩したか? (2018. 6) ,p.i- iii
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学工学部大学院講義ノート
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO52003003-00000000--003

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

目次

第 1 講	コペンハーゲン解釈 (量子言語) の速習	1
1.1	量子言語 (=測定理論) の概要 (cf. 文献 [KOARA 2018; コペン])	2
1.2	世界記述の哲学の発展史と本書の目的	13
1.3	実在的世界記述と言語的世界記述	19
1.4	量子言語からの帰結	25
1.5	進歩問題の解決とその系 (心身問題と因果問題)	29
第 2 講	古代ギリシャ哲学 (ソクラテス以前)	37
2.1	タレス: 最初の哲学者: 「万物の根源は水である」	37
2.2	ピタゴラス; 万物は数なり	42
2.3	ヘラクレイトスとパルメニデス; 万物は流転か? 静止か?	47
2.4	ゼノン; 運動のパラドックス	54
第 3 講	ギリシャの三哲 (ソクラテス, プラトン)	61
3.1	プロタゴラスとソクラテス (哲学が文系になった)	61
3.2	プラトン; アイデア論	66
3.3	プラトン: 空想的言語的世界記述	70
3.4	二元論のキーワード	74
3.5	プラトンのアカデメイア; 幾何学を知らぬ者, くぐるべからず	78
3.6	まとめ: プラトン流の哲学の語り方	81
第 4 講	ギリシャの三哲 (アリストテレス)	87
4.1	アリストテレス; 万学の祖	88
4.2	運動・変化の根源は何か?	92
4.3	アリストテレスの三段論法	96
第 5 講	アレクサンドリア周辺	101
5.1	アレクサンドリア周辺	102
5.2	ユークリッド (幾何学に王道なし)	103
5.3	アリストタルコス; 古代の地動説	113
5.4	アルキメデス;(エウレーカ (発見した))	115
5.5	エラトステネス; 古代最大の測定者	122
5.6	クラウディオス・プトレマイオス; 天動説	124

第 6 講	中世 - 暗黒時代 -	127
6.1	アウグスティヌス; 現在しか存在しない	128
6.2	スコラ哲学 - プラトン派からアリストテレス派へ -	138
6.3	ゼロの発見	141
6.4	神の存在証明	144
6.5	普遍論争	147
6.6	トマス・アクィナス; 普遍論争	150
6.7	オッカムの剃刀	154
第 7 講	近世 - 天動説から地動説へ	157
7.1	パラダイム・シフト	158
7.2	経験論の祖ベーコン: 知は力なり, 帰納主義; イドラ	161
7.3	天動説から地動説へ	164
7.4	『新科学対話 (ガリレオ)』で, いまだに不思議なこと	170
7.5	ニュートン登場『プリンキピア』	172
7.6	再考 [座標とは何か?]; ニュートンはなぜ微分方程式を使わないでプリンキピアを著したのか?	177
第 8 講	近代哲学の父: デカルト	183
8.1	コギト命題と自己言及的命題 (≈ 反コペンハーゲン解釈的命題)	184
8.2	「我思う, ゆえに我あり」と我思う (デカルト『方法序説』)	189
8.3	デカルトの戦略; 哲学とはキャッチコピーのこと	193
8.4	デカルト哲学と量子言語のキーワード対応	197
第 9 講	近代哲学 (ジョン・ロック, ライプニッツ, バークリー)	203
9.1	ジョン・ロック; イギリス経験論の祖	204
9.2	第一性質と第二性質	208
9.3	「イギリス経験論 vs. 大陸合理主義」という演出	212
9.4	ライプニッツ=クラークの往復書簡	214
9.5	唯心論: バークリー「存在するとは知覚されること」	218
9.6	「アインシュタイン=タゴール対話」と「ボーア=アインシュタイン論争」	222
9.7	測定しなかった懐疑主義者: ヒューム『人間本性論』	227
第 10 講	カント; 純粹理性批判; 観念論の発見	235
10.1	ご冗談でしょう. カントさん: 二律背反 (アンチノミー)	236
10.2	カントの認識論; コペルニクスの転回	243
10.3	まとめ; デカルト=カント哲学	254
10.4	未解決問題; 因果関係とは何か?	258
10.5	「フッサールから脳科学へ」は本流か?	262
第 11 講	言語哲学	267
11.1	言語論的転回『論理哲学論考』	268
11.2	哲学者の資質は, 言葉の力	272
11.3	言語論的転回で蘇る純粹理性批判	276

11.4	「哲学は進歩する」の系	283
第 12 講	あとがき	287
12.1	当然のことであるが, 文学部哲学科の哲学は文芸的	287
12.2	量子言語は二元論的観念論の唯一の科学的成功例	288
12.3	最後のまとめ	296
12.4	最後に	297
	参考文献	301
	索引	304